対象者理解を深めるために

社会福祉法人
聖隷福祉事業団　　上 原　久

「対象者理解を深める」とは…

「対象者（事例）理解を深める」とは…

　連綿と続く人生のなかから、事例が生きぬいてきた過去の出来事や、今ここで課題になっている事象に焦点をあてながら、①～③について整理する。

①現状の査定（何が起こっているのか）
②背景の理解（そうなった経緯や背景は何か）
③主要テーマの把握（根底に流れるテーマは何か）

その上で…、
事例が歩んできた足跡とこれから拓かれる未来の間に「意味深い物語」を紡ごうとする営みです。

「対象者理解を深める」ことの前提として…

基本的に…

「相手を理解する(解る)ことは不可能である」という前提を置きます。

①解らないからこそ、知ろう・解ろうとする　　「相手に向きあう姿勢」

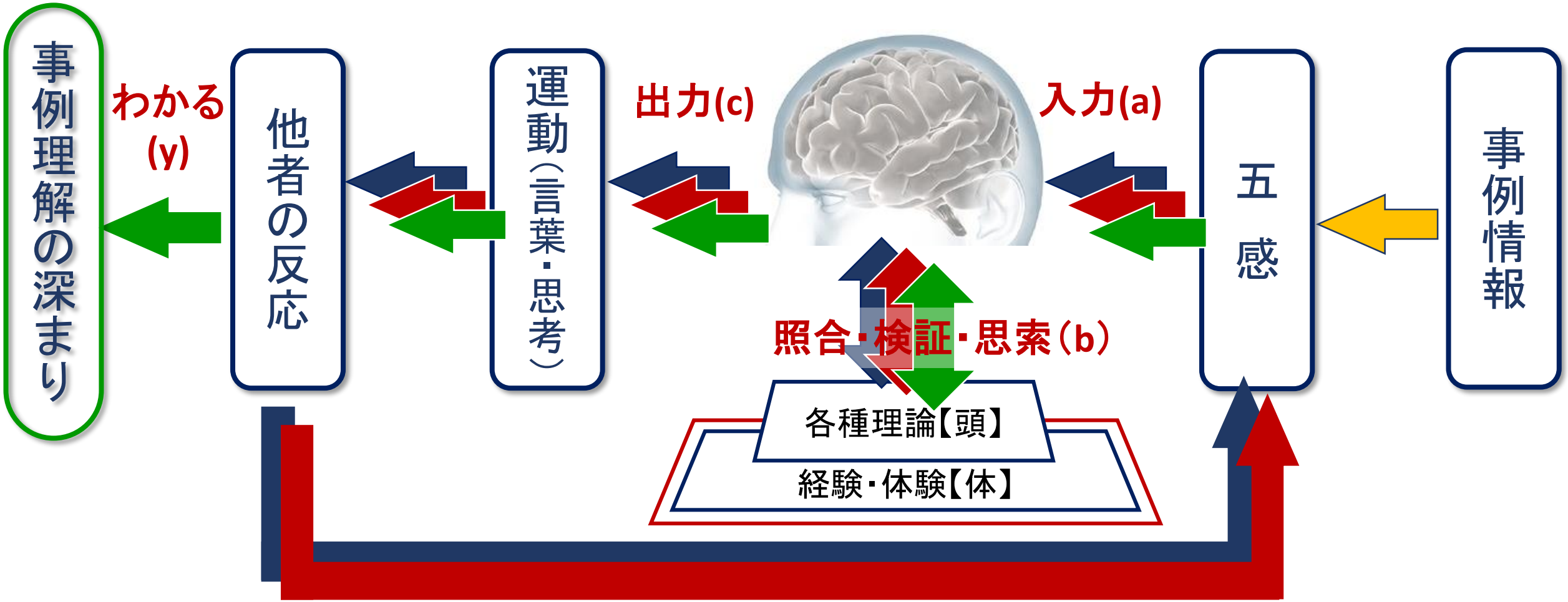
②自分の体験と相手の体験を重ねて考える　　「リアルな感性」

③支援者の経験智を最大限に活用する　　「情報の再構成」

この総体的な営みを通して、「見立て」や「対象者理解」を深めていきます。

*対象者理解は「How to」によって学べる(身につく)ものではありません

「わかる」ということ:「事例理解を深める」ための方法



【 y（わかる）＝ a × b × c 】

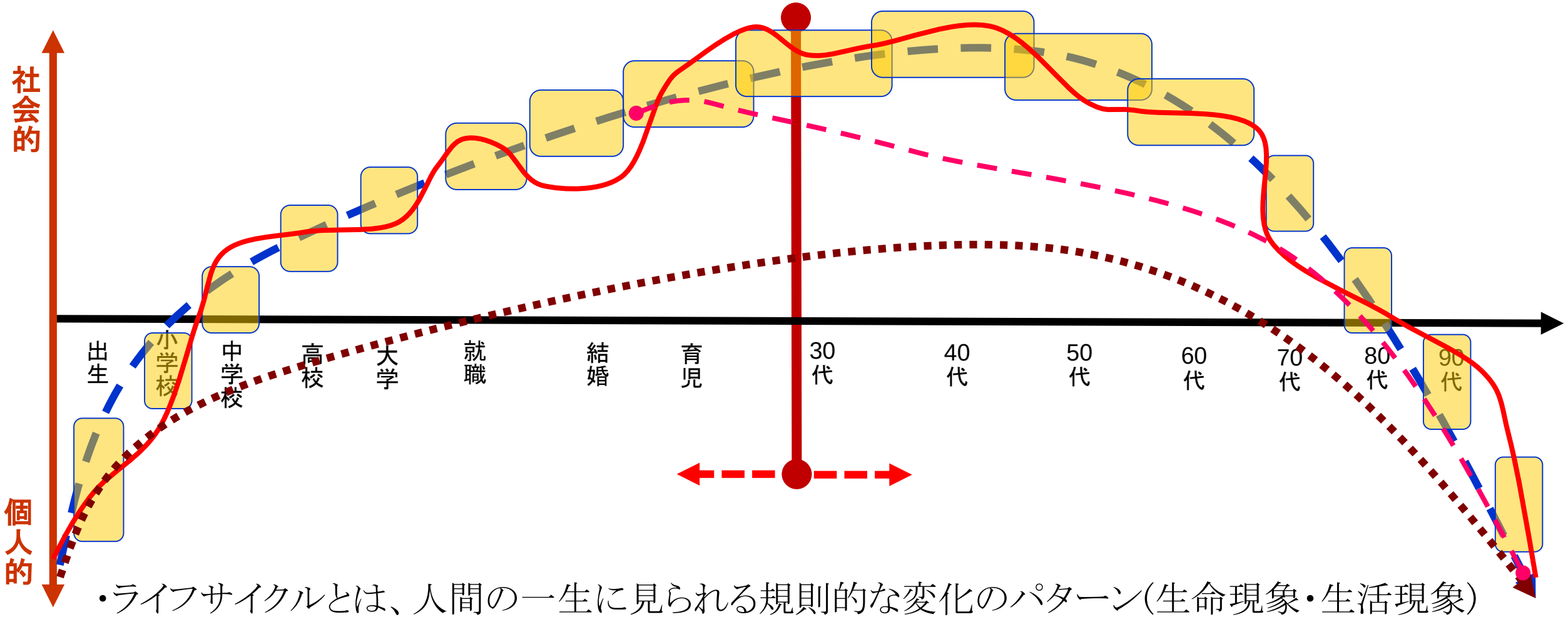
「わかる」＝「入力」×「思索等」×「出力」の反復　⇒　身につく（≒支援者の変化）

養老孟司：「長野県学びの県づくりフォーラムvol.2」https://youtu.be/yaotedIm3M8、平成31年3月23日より作図

対象者理解に必要な諸理論
・・・主に「連携」の場合・・・

「わかる」→「わかり合う」にするための共通軸

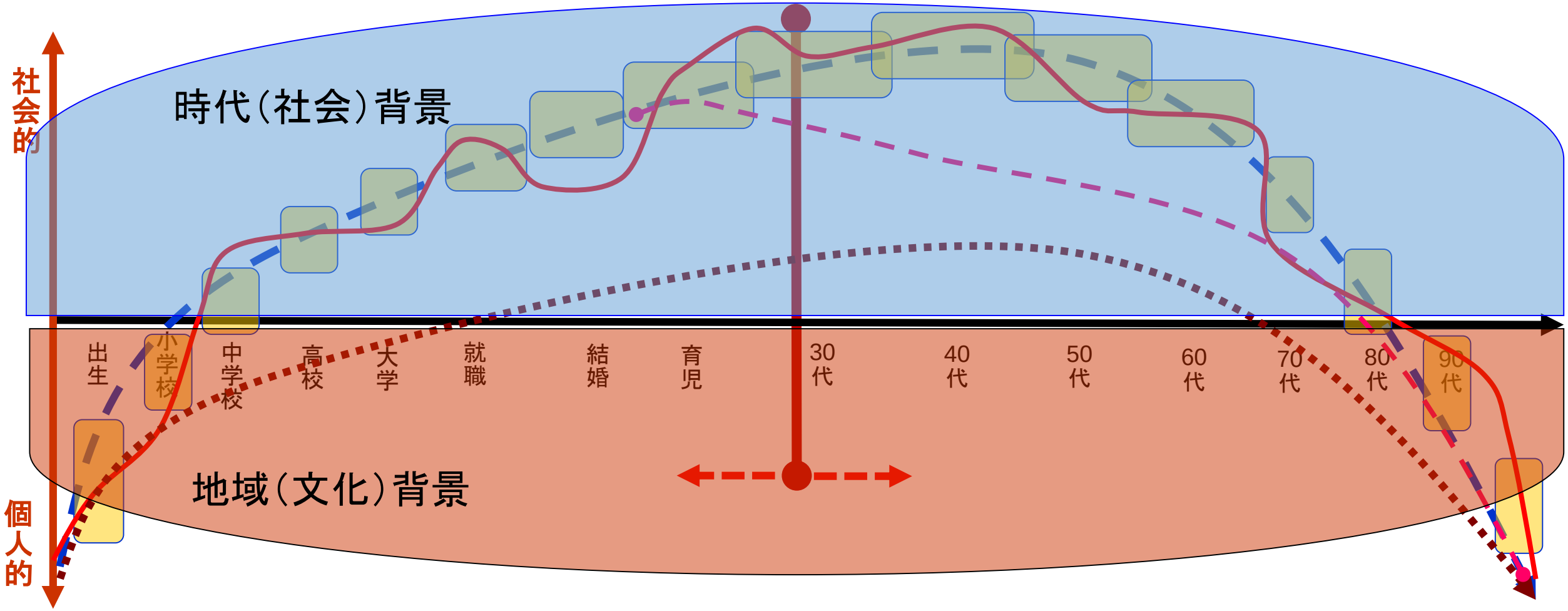
ライフサイクル、ライフイベント、ライフコースと発達課題



・ライフサイクルとは、人間の一生に見られる規則的な変化のパターン(生命現象・生活現象)
・各ステージには、身体・心理・社会的な課題(発達課題)がある。
・どのステージで、「誰と」「どんな出来事」に会う(遇う)かによって、人生(ライフコース)が変わる。
・注目すべきは、その「良し悪し」ではなく、その課題(出来事)に「取り組む姿勢」にある。

上原　久「ケア会議の技術2」P.70-81、中央法規出版、2012年

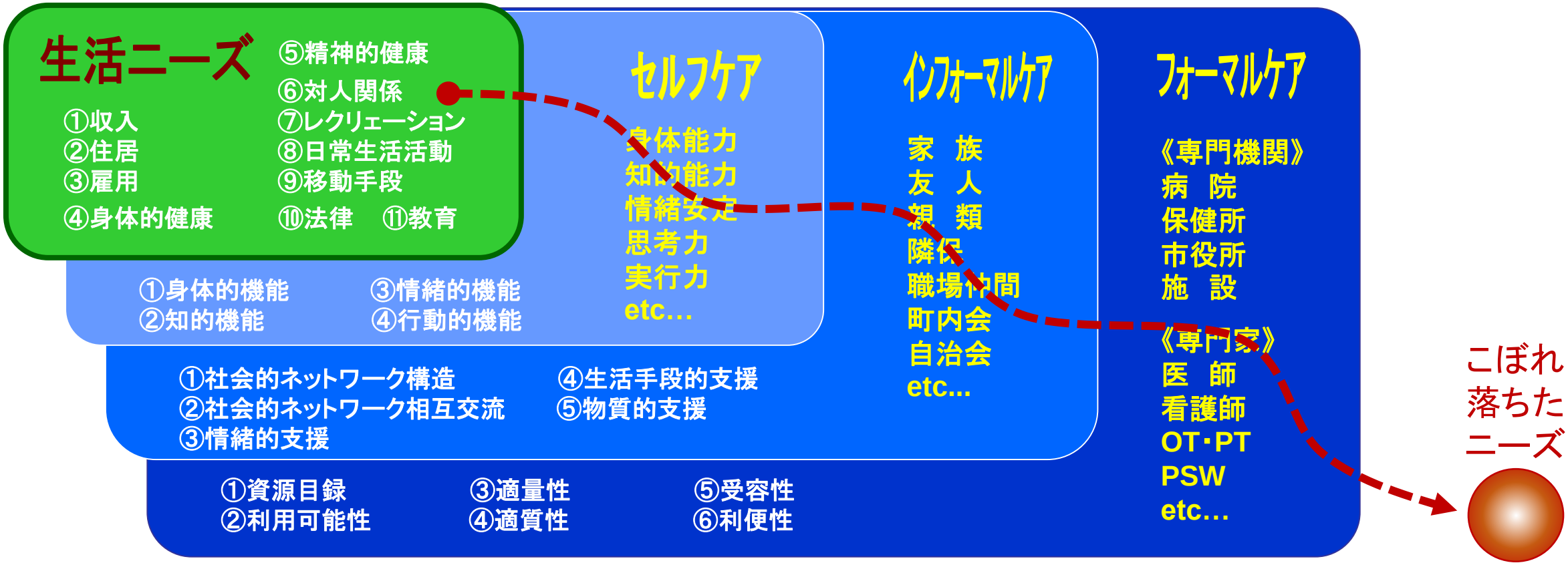
時代背景と地域背景



・時代や社会は「外的要因」。個人によるコントロールは不可能。「善」にも「悪」にもなる。
・個人が「どう生き抜くか…」「どのような意味を見出すか」は時代や地域(文化)の影響を受ける。
・しかし逆に、「信条」や「主義」が形成（育成）される過程でもある。

上原　久「ケア会議の技術2」P.70-81、中央法規出版、2012年

ケアシステム論



- 「生活」とは、ニーズを充足(ケア)しながら営まれる過程。
- ケアの構造は、重層的(セルフケア、インフォーマルケア、フォーマルケア)である。
- ライフイベント(出来事)は、ケアシステムに危機的状況を及ぼす場合がある(慢性的・突発的)。
- ケアシステムが十分に機能しない場合、ニーズは満たされず「こぼれ落ちた状態」となる。
- そのニーズは「どの段階で」「どのようにケアされるのか」を、構造的に把握する。

David P Moxley : The Practice of Case Management(1989)を参考に作図

対象喪失理論：喪の仕事（mourning work）

1.喪失体験とは
　死別や離別等によって愛情や依存の対象を失う体験

2.対象
　人だけでなく、自分の身体の一部、健康、社会的地位、物、金なども含まれる

3.その反応（喪失反応）
　悲嘆や怒りなど様々な心理的反応を示す。対象喪失を受容して心の健康を
　回復させるために必要な過程。喪失対象の再建・再創造によって終結する。

4.悲嘆のプロセス(アルフォンスデーケンの12段階)
　①精神的打撃と麻痺状態、②否認、③パニック、④怒りと不当感、
　⑤敵意とうらみ（ルサンチマン）、⑥罪意識、⑦空想形成、幻想、
　⑧孤独感と憂鬱、⑨精神的混乱と無関心（アパシー）、⑩あきらめ–受容、
　⑪新しい希望––ユーモアと笑いの再発見、
　⑫立ち直りの段階––新しいアイデンティティの誕生

直線的ではなく、行ったり来たり or 浮き沈みしながら、ゆっくり or 早く…、進んでいく

〔資料〕配偶者の死を100とした場合のストレス値

ストレス値＝エネルギーの度合い （Holmes＆Rahe 1967）

No.	日常の出来事	値
1	配偶者の死	100
2	離婚	73
3	夫婦別居	65
4	刑務所への収容	63
5	近親者の死亡	63
6	本人の大きなけがや病気	53
7	結婚	50
8	失業	47
9	夫婦の和解	45
10	退職・引退	45
11	家族の健康の変化	44
12	妊娠	40
13	性生活の困難	39
14	新しい家族メンバーの加入	39
15	仕事上の変化	39
16	家系上の変化	38
17	親友の死	37
18	配置転換・転勤	36
19	夫婦ゲンカの回数の変化	35
20	一万ドル以上の借金	31
21	借金やローンの抵当流れ	30

No.	日常の出来事	値
22	仕事の地位の変化	29
23	子女の結婚	29
24	親戚関係でのトラブル	29
25	個人的な成功	28
26	妻の就職・退職	26
27	進学・卒業	26
28	生活環境の変化	25
29	個人的習慣の変更	24
30	上司とのトラブル	23
31	労働時間や労働条件の変化	20
32	転居	20
33	転校	20
34	レクリエーションの変化	19
35	社会活動の変化	19
36	宗教活動の変化	18
37	一万ドル以下の借金	17
38	睡眠習慣の変化	16
39	家族の数の変化	15
40	食習慣の変化	15
41	長期休暇	13
42	クリスマス	12

理解したことを伝える

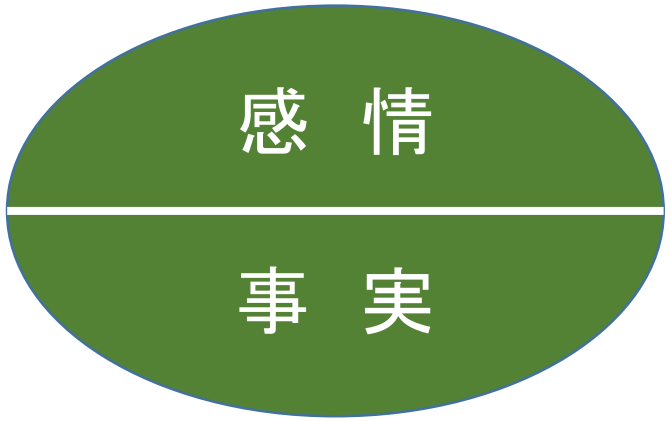
●対 対象者

・「出来事」は「事実」と「感情」がセットです。「事実」→「感情」の順に焦点をあてましょう【1】
・私たちの「対象者理解」は、言葉として表現できるものばかりではないかもしれません。
・「言葉にならないことば」の方が、相手の心に届く(響く)場合もあります。
・「知りたがり」は抵抗を招く場合があるので注意が必要です。
・しかし、抵抗は自然な反応です。「一気に」ではなく「ゆっくり」わかるのが良いでしょう。
・「わかったフリ」は厳禁です。

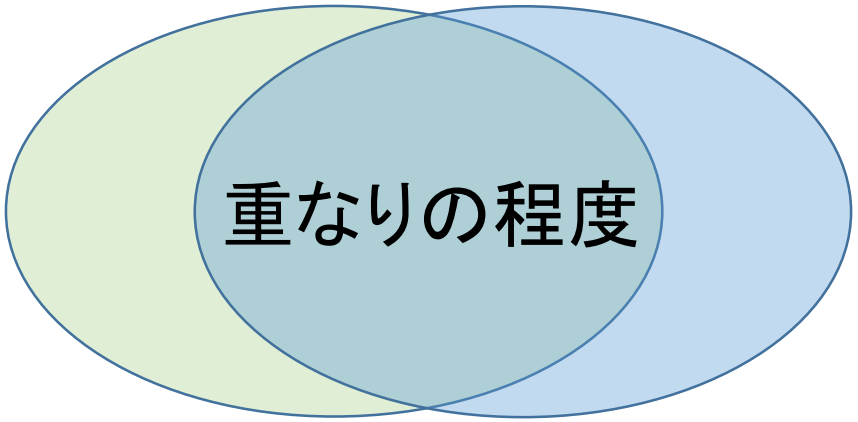
●対 連携職種

・完全一致ではなく、「凡その重なりあいの広さ」に焦点を合わせましょう【2】
・個別具体的な言葉を適切に選びましょう。

【1】



【2】



まとめ

1. 対象者理解を深めるとは
　　⇒①現状の査定、②背景の理解、③主要テーマの把握：未来に向けて紡ぐ

2. 対象者理解を深めることの前提
　　⇒「<u>相手を理解する(解る)ことは不可能である</u>」という前提を置く

3. 「わかる」ということ
「わかる」＝ 「入力×思索×出力」の反復 ⇒　身につく（≒支援者の変化）

4. 「わかる」→「わかりあう」ために
　　⇒共通の軸があると便利
　　①ライフサイクル、ライフイベント、ライフコース
　　②時代背景と地域背景、③ケアシステム論、④対象喪失理論、⑤ストレス値

5. 理解したことを伝える
　　⇒①「事実」→「感情」の順、②「凡その重なりあいの広さ」に焦点化。